

はじめに

親父が3年前、脳梗塞で倒れた。救急治療の病院からリハビリの病院へ。そして、片マヒは残り、楽しみだった畑仕事はできなくなった。が、「文字が書きたい」という希望はなかった。おふくろは親父の在宅での日常を全面的に支えている。

介護区分は7段階の下から2番・要支援2（Ⅱ）なんらかの支援は必要だ。人口1万ほどの地方の町には、利用できる介護サービスは無い。

愚痴を聞くくらいしかできないけれど、時間をつくって、片道2時間半の道のりを車で飛ばす。

*

こんな話をはじめると、いるいる同じような境遇の仲間たちが。

55歳が近づき、仕事はますます責任が重くなる中、子育てから少しは「卒業」と感じはじめたかと思えば、故郷に暮らす年老いていく親たちの介護問題が悩みになる。

私たちの研究会ではこの「世代」を「アラウンド55（ゴーゴー）」と名づけて、情報や意見交流をはじめている。

でも、これは親の介護にとどまらない。私たちの人生にかかわる重大問題だ。

日本が超高齢化を迎えるころの主役は、数十年後の私たちだ。私かカミサンかどちらかが介護が必要になる。同時多発かもしれない。

そのとき・・・

北欧・デンマークのオーフス市ならば、1・5万人の地区ごとに275名の福祉スタッフが配置され、地域にある206の高齢者住宅が活用できる（内105は特別養護老人ホーム）。もちろん医療費も介護料も無料だ。これは高齢化によるものだけでなく、なんらかの障害を理由としても同じだ。

だれもが年をとる。だれもが障害者になる可能性がある。

北欧では、障害があろうとなかろうと、18歳になれば子どもは家庭から独立し、その後は社会が責任をもつ。

みんなは一人のためにあり、一人はみんなのためにある。

しかし、日本ではどうだろう。「責任は家族にある」。介護保険も障害者自立支援法も根っこにはその思想がある。その違いはどこから生まれてくるのだろうか。

*

福祉、教育、そして障害者。20歳の頃から問題意識を持っていたテーマは、私が働いてきた全国障害者問題研究会のテーマそのものでもある。

「百聞は一見にしかず」と1993年に北欧をはじめて訪ねた。

それから現在まで6度、旅を重ねている。

2度目の旅の団長・社会保障法の小川政亮先生は、

「百聞したからこそ、一見が価値をもつ」

と厳しくも優しいアドバイスをくれた。

以来、北欧を学び、デンマーク、スウェーデン、フィンランドのそれぞれの現場を見て、聞いて、感じ、考えたことをいくつかの雑誌やインターネット、各報告集などで発信してきた。

*

初めて北欧を訪ねたとき、「日本とは30年くらいの差かもしれない」と感じた。

2度目には「3世代くらい経ないと民主主義は育たないのかも」とため息をついた。

そして、3度目には、「マラソンのトップランナーの背中がもう見えない」。

それからは、日本との「差」を見るのではなく、その「違い」の背景と「思想」を、何でも見てやろうと思っっている。

この本は、人生の真ん中で、人生は有限であることを感じ、本格的に人生を考えはじめた私の、北欧への学びと出会いの旅の「中間まとめ」だ。

*

シベリア上空で、

「あのお日様は夕陽なの？ それとも朝日なわけ？」
とカミサンが言い出した。

太田裕美似のフライトアテンダントに聞くと、

「ちょっと相対的なもので、飛行機も移動してますから・・・」

地上でみる夕陽と高度1万メートル上空で太陽を追いかけるようにすすんでいる飛行機の中から見える太陽の関係について、彼女は一生懸命説明してくれるのだが、やはりよくわからない。

成田を発ったのが午前11時すぎ。向かい風の影響で予定フライトの9時間半より1時間遅れて、ヘルシンキのヴィンター空港に着いたときには、陽は沈んでいた。

これから北欧の旅が始まる。

